

審査員が心得べき事柄を示す

祇甲淨瑠璃科擔任技師

鶴澤友造 案

鶴澤友次郎門の高弟で逸材の鶴澤友造君は新らしい頭腦の持主である、君は京都祇園甲部淨瑠璃科擔任教師を勤めてゐるが、祇甲義太夫技藝試験に當り審査員が如何なる水準のもとに審査するかについて苦心した結果、一の「試験考查方法」なるものを案出し此の方法によりて優劣を審査實行してゐる、流石に三味線界の新人だけに審査の委曲を盡し餘すところなく且つ公平に成績を決定し得られる、その「考查方法」なるものを左に紹介する。

淨瑠璃を語る者、その三味線を弾く者、或は彈語りをする者、それ／＼その人物、聲、顔の異なる如く上手下手あり。巧者強ち巧者に非ず、下手より以下に劣れる個所あり。下手亦下積を嘆く勿れ、巧者な者も遠く及ばざる自然の妙味を發揮して感動を與ふことあり。各々その個性によりて獨特の優技と缺點を持つものである、結局「上手も下手も紙一重」であつてそれを參照して缺點の大小を判別して甲乙を採點する位で

ある。

それも三名か五名ぐらゐならば此の程度で採點し得られるが、十名二十名と多くなり、優劣を定め兼ねる場合の選擇には詮衡難に陥る、如何に新進に巧拙ありとは言へ古豪には新參の遠く及ばざる貫録と情緒とは言外に露はせぬ含蓄がある。たゞ缺點のみ穴探しに全力を注いでゐると、その特有の含蓄を聽落して仕舞ふ、然し技藝の向上を圖る上に於ては優劣の區別をつけ獎勵せ

ねばならぬ、仍つて左の考查方法を以て席順を定めたいと思ひ爾か言ふ。

淨瑠璃科試験考查方法

昭和十八年九月

◇稽古出席率

- 甲は十回に對する八回以上出席
- 乙は同 六回以上出席
- 丙は同 四回以上出席
- 丁は同 三回以下出席

◇姿勢

- 甲。泰然と崩れざる貫録ある構へ
- 乙。泰然たるも稍貫録に乏しきもの
- 丙。最初は良とすれど途中より崩れる構へ
- 丁。綜合してより以上惡きもの

◇發音（聲）

- 甲。腹力ある優美なる聲
- 乙。腹力ある美に滋味ある聲。
- 丙。腹力に乏しき 〔美なる小音聲
滋味なる聲〕
- 丁。綜合してより以上の惡聲

◇三味線の音色も之に準ず

◇節（地合、音遣ひ）

- 甲。文章明瞭、優雅なる節廻し巧妙なるもの。

我等は嚴肅敬虔に古典藝術を研究し以て藝能報國に邁進せんぞ。
我等は古典藝術を遊戲視するものを排斥す。
我等は我が國傳統の情操陶冶の涵養に努めんぞ。

村